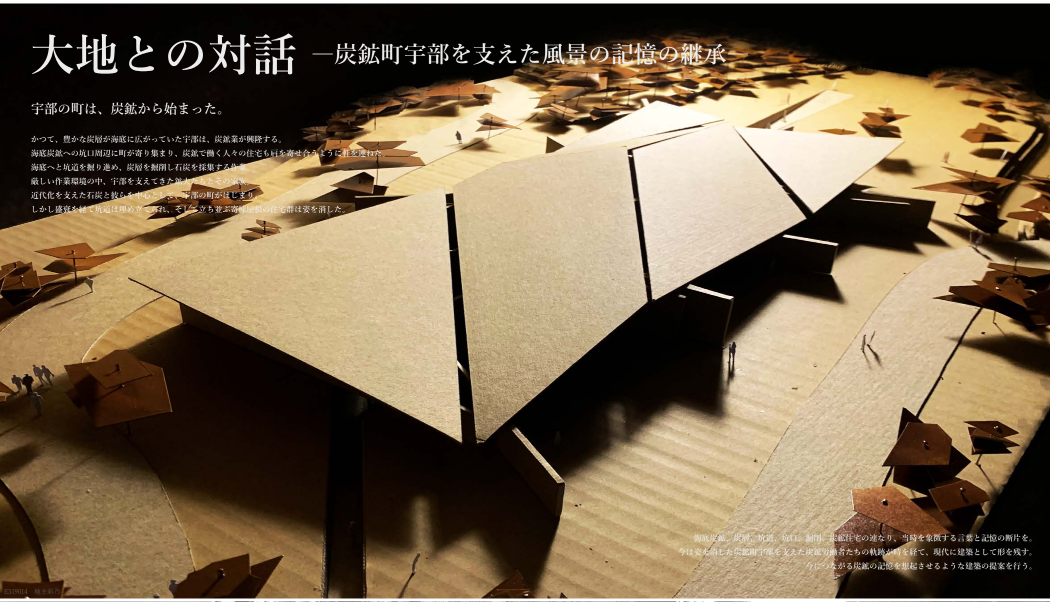
大地との対話 ―炭鉱町宇部を支えた風景の記憶の継承―

宇部の町は、炭鉱から始まった。

かつて、豊かな炭層が海底に広がっていた宇部は、炭鉱業が興隆する。
海底炭鉱への坑口周辺に町が寄り集まり、炭鉱で働く人々の住宅も肩を寄せ合うように軒を連ねた。
海底へと坑道を掘り進め、炭層を掘削し石炭を採集する作業。
厳しい作業環境の中、宇部を支えてきた鉱夫たちとその家族。
近代化を支えた石炭と彼らを中心として、宇部の町がはじまり、
しかし盛衰を経て坑道は埋め立てられ、そして立ち並ぶ寄棟屋根の住宅群は姿を消した。

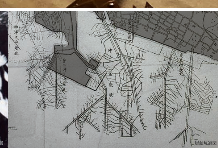


海底炭鉱、炭層、坑道、坑口、掘削、炭鉱住宅の連なり、当時を象徴する言葉と記憶の断片を。
今は姿を消した炭鉱町宇部を支えた炭鉱労働者たちの軌跡が時を経て、現代に建築として形を残す。
今につながる炭鉱の記憶を想起させるような建築の提案を行う。

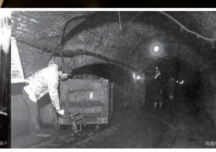
E319014　地主彩乃

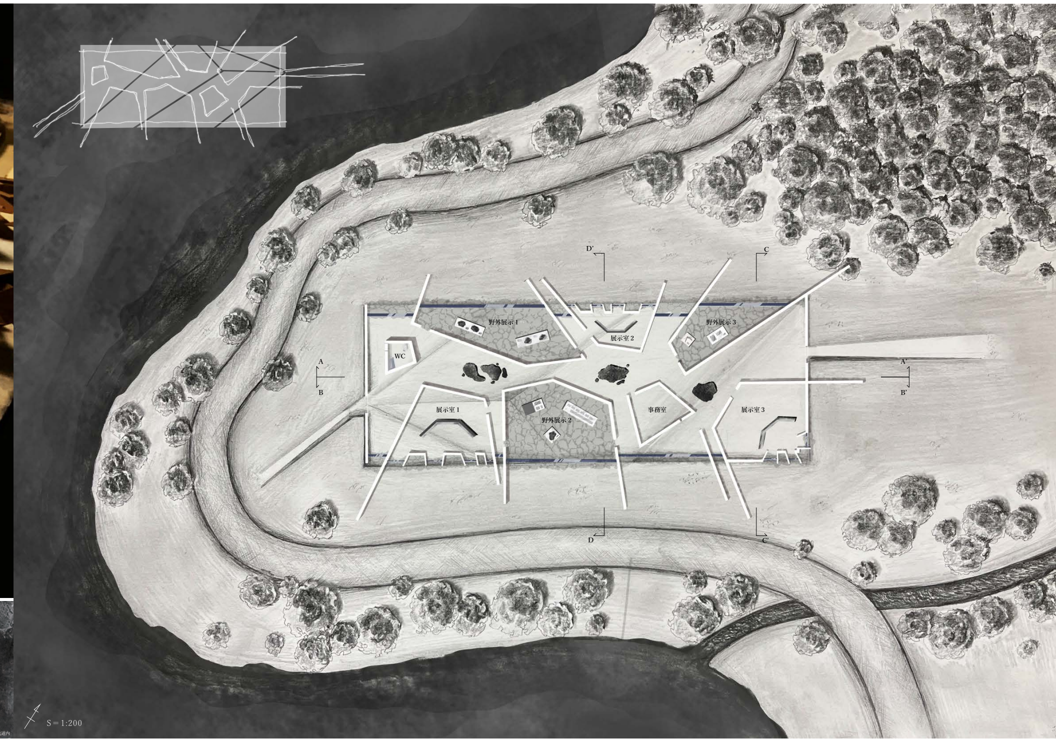
沖ノ山炭鉱住宅地区

坑道内作業風景


炭鉱坑道図

炭鉱住宅地区の様子


坑道内



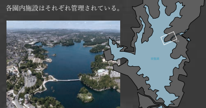
S＝1:200

01. 海底炭鉱

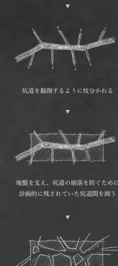
宇部炭鉱群沖ノ山炭鉱は山口県瀬戸内海側に広がり、宇部市から山陽小野田市にまで及ぶ海底炭鉱の総称である。　炭田の開発は江戸時代から行われ、海底への開発は明治時代より開始した。1967 年の閉山後から現在に至るまでに、各炭鉱住宅地区はほぼ取り壊されている。
当時は海底の炭層を採掘するため、採炭場所が沖合に進むと海上に人口島や竪坑を作り効率化を図った。沖合に鉱区を拡大し埋立地が主な炭鉱住宅地区となり、炭鉱住宅が沿岸部に連なった。

02. 敷地

山口県宇部市ときわ公園内常盤湖に隣接する敷地である。周辺の桜並木と森、広大な水面を望む長く突き出した岬となっている。
ときわ公園は、動物園・植物園・遊園地・ミュージアム・キャンプ場など文化活動からアウトドア施設まで、豊かな自然を満喫できる各種施設が設置された、広さおよそ 190ha の広大な公園である。公園自体は常時解放され、各園内施設はそれぞれ管理されている。



03. ダイアグラム



沖ノ山炭鉱の主要坑道を敷地に落としこむ

▼

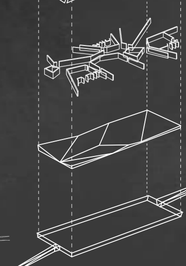
坑道を掘削するように枝分かれる

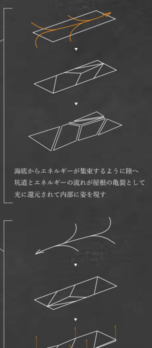
▼

地盤を支え、坑道の崩落を防ぐために計画的に残されていた坑道間を囲う

▼

海底における採炭作業の広がりと坑口から下り入坑するようなスロープ



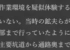


海底からエネルギーが集束するように陸へ坑道とエネルギーの流れが屋根の亀裂として光に還元されて内部に姿を現す

海底へと石炭を求め、各地から炭鉱へ集まり、炭鉱町を築いた鉱夫たち
海上を埋め立てて形成された炭鉱町宇部

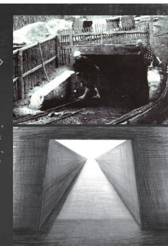
04. 計画

沖ノ山炭鉱を含む宇部炭鉱群の資料館。
展示室と野外展示を対として、炭鉱の歴史を三段階にわけて展示する。

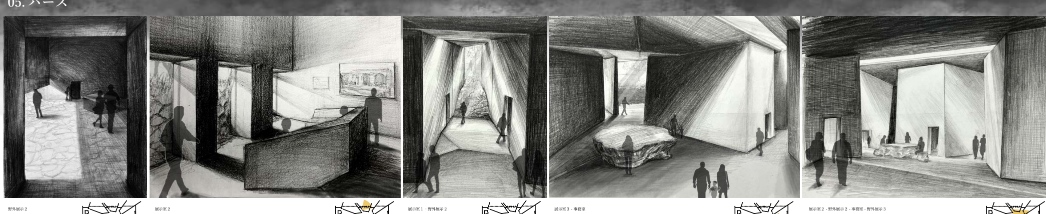


右の写真の炭鉱坑口と、パースのスロープのように、過去の炭鉱の面影をもつ空間を作り出す。
訪れた人々は、炭鉱住宅地区の交流、写真に残された歴史、文献から知る坑道内の作業環境を疑似体験する。
各展示室への動線は決まっていない。当時の鉱夫らが毎日作業のために坑道の最深部まで行っていたように、この資料館では、さまよい、主要坑道から通路奥まで入り込む。

さまようことで、空間から記憶を想起させ、また新たな交流が発生し、暗闇に慣れ光を敏感に感じる。



05. パース



野外展示 2

内と外

各展示室と野外展示は対となっており、宇部炭鉱の歴史を３段階に分け、展示することを想定している。特に、野外展示スペースは、目線下から光と空気が入り込み、かつての炭鉱のように内部と外部の曖昧さを感じることができる。

展示室 2

大地の展示

沖ノ山炭鉱の資料・写真を閲覧できる展示室では、外部の景色の切り取りを眺めながら、過ごすことができる。地中から地表面、大地から空へとつながる景色は、非日常空間で自然な時間の流れを作り出す。
大きさの異なる開口部、傾斜のついた床や天井面、それぞれが不規則に形成する空間で、訪れた人々は各自好きなように過ごすうちに炭鉱の記憶の端緒を感じ取る。

展示室 1・野外展示 2

光

壁と壁、屋根と屋根のはざまから差し込む光が、大地から流れる石畳に陰影を生み、つながりと境界をみせる。細長く切り取られる外部は、環境の動きに合わせた変化で、訪れた人々へ唯一の景色を贈る。

展示室 3・事務室

坑道の軌跡と光

エネルギーの流れ、過去の坑道の形状を落とし込んだ内部空間には、坑道の軌跡が光に還元され降り注ぐ。屋根の亀裂から落ちてくる光は、地面の起伏に反射し空間を淡く照らし、影と光のコントラストを作り出す。それぞれ傾斜のついた壁、床、屋根が織りなす空間の中は一歩で景色が様変わりする。五感で変化を感じる空間はわずかな空気の流れを感じ取って作業していた炭鉱構内を想起させる。

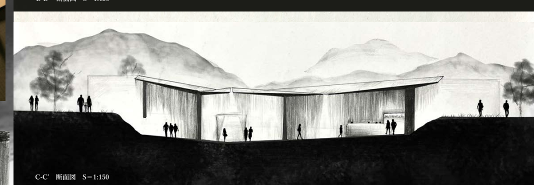
展示室 2・野外展示 2・事務室・野外展示 3

空間の重心

炭鉱の坑道のように四方に伸びた通路から各展示室へは、坑道内を奥まで進むように、奥まった入口へ行く必要がある。しかし中心となる広場には、主要通路に向かって開口が開かれている。
かつて鉱夫たちが居住していた炭鉱住宅地区で密なコミュニティが形成されていたように、訪れた人の集まる空間として重心が置かれている。

A-A'　断面図　S＝1:150

B-B'　断面図　S＝1:150


C-C'　断面図　S＝1:150

D-D'　断面図　S＝1:150

地上から見る屋根は、遠方の山のように、遠い存在だがそこにあることが当たり前で身近として公園を訪れる人々に寄り添い、炭鉱の記憶を継承していく。